

雑談における聞き手行動指導の可能性

稲 飯 亜有美・才 田 いずみ

キーワード：雑談、接触場面、聞き手行動、「リアクション」

要旨

日本語の雑談においては、語るだけでなく、相手の語りをサポートし会話を円滑に進めていく聞き手の反応も重要になる。接触場面雑談のデータを分析した結果、日本語学習者は話し手の語りを促進するような「リアクション」が取れていないことが明らかになり、中でも言いさし発話に対する反応の中には、会話の自然な流れを止めてしまうものが多数観察された。今後の会話教育では、雑談における聞き手行動の重要性を指導する必要があると考えられる。

1. はじめに

日本で暮らす外国人の増加に併せて、日本語教育の重要性が高まっている。留学生や労働者、また家族として日本で暮らす外国人が日本のコミュニティに馴染んでいくためには、生活や学問、仕事で使われる日本語を習得していく必要があると言えるだろう。しかし、日常生活には困らないレベルの日本語能力を身につけたとしても、日本人とうまく雑談ができない、日本人の友達ができないといった悩みを持っている学習者が多くいるという(筒井, 2012)。外国人留学生を対象に「日本語の雑談のどんな点が難しいか」というアンケート調査を行った清水(2017)によると、学習者が雑談に関して抱えている問題は多岐にわたり、様々な点で困難を感じていることが明らかにされた。例として、雑談の中でよく出てくる中途終了文や倒置文は教室で習う文と異なるためわからない、雑談の場で使われるインフォーマルな言葉がわからない、相手に合わせて話題を選ぶのが難しい、相手の発話にどう返したらいいかわからないなどが挙げられている。こういった学習者の声からは、学習者が教室で習う日本語と雑談で使われる日本語が異なっていること、そして学習者は雑談という技能を体系的に習う機会がほとんどないことが推察できる。

筒井(2012)では、雑談を「目的のないおしゃべり」と表現し、「特定の達成するべき課題がない状況において、あるいは課題があってもそれを行っていない時間におい

て、相手と共に時を過ごす活動として行う会話」(p. 33)と定義している。しかし、一つひとつの雑談には達成すべき課題がないとしても、長期的な視点から考えると、雑談には「相手との良好な社会的関係を構築したり、維持したりする」という目的があると言える(清水, 2017)。日本語学習者にとって、日本語で雑談ができるということは、日本人と仲良くなりコミュニティに馴染んでいく重要な要素であることは間違いないだろう。

現在、日本語での雑談に問題を抱えている学習者が数多くいるにもかかわらず、雑談を指導する方法が未だ定まっていないという現実がある。筒井(2012)で「同じ相手と何度も雑談を行う中で、扱える話題ややり取りの仕方なども変化するため、一つの型を覚えればすむというものでもない。」と述べられているように、雑談の難しさは、話題や展開の多様さにあると言えるだろう。同じ話題でも相手や状況によって展開が異なり、完全に先を予想することはできないという雑談の特徴が、雑談指導の難しさにもつながっていると考えられる。

また、用事がある時や問題を解決したいときになされる課題遂行型の会話とは異なり、自然な流れやテンポが重視される点も雑談の特徴の一つである。雑談の中では主語や助詞の省略、倒置、音の脱落などが頻繁に起こったり、スラングや方言が使われたりすることも多く(清水, 2017)、教科書通りの日本語がそのままの形で現れることは少ない。こういった側面を考えると、雑談は「依頼」「断り」などの明確な課題のあるコミュニケーションとは異なる会話技能として指導される必要があると言えるだろう。

本稿は、接触場面の雑談において学習者が抱える問題の中でも、聞き手行動、特に話し手の語りを促進する「リアクション」に注目して分析を行い、雑談教育において「リアクション」がどのように指導されるべきか、その方策を探ることを目的としている。なお、「リアクション」は「相手の発話に対する反応のうち、いわゆる隣接対をなさない形式のもの」(才田・稲飯, 2019)と定義し、「うん」「はい」などのあいづちを除く、相手の発話を受けての感想・意見・評価・質問などの発話を幅広く包括するものとする。

2. 問題の所在

日本語の会話は、水谷(1980)に指摘されているように、一人が自分の話を最後まで述べ、その後にはほかの一人が自分の話を始めるのではなく、話し手と聞き手が互いに

補い合いながら話の流れを作っていく「共話」というスタイルを取っている。つまり、会話を円滑に進めていくためには、聞き手が話し手の語りに積極的に関わっていく必要があると言える。しかし、接触場面雑談のデータを見ると、学習者に「共話」的な聞き手行動がうまく取れていない例が多く観察された。

例1

1-13 F1	で(1)で次(.)がーあのA県のH市ー[にある	
1-14 J1	[あ(.)Aいたんですか？	←
1-15 F1	はい(.)H大学に4年間.	
1-16 J1	[はい	
1-17 F1	[学部(.)卒業して(.)今年S<町の名前>に(1)はい.	
1-18 J1	来て.	←
1-19 F1	[そうですね.	
1-20 J1	[この(.)T大学来たっていう.	←
1-21 F1	はい.	

例2

1-28 J1	うんと(.)なん(2)普通に今学部4年の
1-29 F1	はい.
1-30 J1	一緒に
1-31 F1	はい.
1-32 J1	今卒論頑張ってるんですけど(2)hh. 結構研究室いらっしやいますよね.

例1、2は、母語話者J1と学習者F1の会話の冒頭部分である。例1では、母語話者J1が学習者F1の発話の途中で1-14「あ(.)Aいたんですか？」と反応を挟んだり、F1の1-17「今年S<町の名前>に(1)はい。」という発話を引き継いで、1-18「来て。」1-20「この(.)T大学来たっていう。」と文を完結させたりしながら、相手の話に積極的に関わっている様子が見られる。一方例2では母語話者J1が話し手となっているが、聞き手である学習者F1は「はい」というあいづち以外の実質的な「リアクション」を取っておらず、J1の語りは早々に終息し、新たな話題が導入されていることがわかる。

このように、自分の考えを話すことや相手の発話を理解することには問題がなく

ても、聞き手が積極的に話し手の語りに「リアクション」を取りながら会話を進めていく「共話」ができていない学習者は多い。自分の話をするだけでなく、相手の話も聞きながらバランスよく会話を進めていくためには、話し手の語りをサポートするような聞き手行動が重要であると言える。

3. 先行研究

前述したとおり、雑談をスムーズに進めていくためには、話し手がただ語るだけでなく聞き手がどのような行動をとるかが重要になる。水谷(1993)は、日本語の会話スタイルについて、「ひとつの発話を必ずしもひとりの話し手が完結させるのではなく、話し手と聞き手の二人で作っていく」(p. 6)と述べ、このようなスタイルを「共話」と呼んでいる。日本語の会話においては、「…です」「…ました」のような完結型の文形式よりも「…て」「…から」「…けど」のような句が続いていくことの方が多く、聞き手側は相手が言い尽くさなかった発話の意図を理解し、その発話を引き取ったり、完結させたりすることが指摘されている。「共話」的な話し方は、相手と背景知識を共有しているという意識の上に成り立っているため、聞き手側の理解にゆだねる部分が大きく、このような会話スタイルに慣れていない外国人にとっては「理解しにくい」と否定的にとらえられることが多いという。

筒井(2012)では、相手から得られた情報に対して興味や関心を示す発話として、評価の発話があると述べている。この評価の発話は、提供された「情報に対する感心や驚き、意外な気持ちなど、その情報の理解以上の評価的な判断を表す発話」(筒井, 2012:79)であり、「情報要求-情報提供」という連鎖の後に評価の発話をすることでより詳細な情報を求める聞き手の気持ちを反映することから、話し手のさらなる情報提供を促進し、その話題を継続させていく効果があると指摘している。つまり、その話題について継続して相手から話を引き出すには、評価の発話を行う必要があると言える。なお、評価の発話の形式については、「形容詞+そう」や「すごい、いいね」などの形容詞、「へえー、おー、うわー」などの間投詞などが挙げられている。

また、日本語教師に向けた雑談の指導書である西郷・清水(2018)では、相手の発話に対して考えられる反応として理解、感想、意見、質問、推測の5種類を挙げた上で、学習者は理解・感想に比べて意見・質問・推測の反応があまりできていないと指摘している(p. 89)。つまり、相手の発話に対する「リアクション」の中でも習得度の高いものとそうでないものがあるということである。会話がワンパターンになってしまうな

いよう、学習者には様々なタイプの「リアクション」を身につけ、会話を広げていく能力が求められると言える。

このように日本語の雑談においては聞き手の行動が会話の進行に大きな影響を与えることが明らかにされているが、学習者が聞き手行動に問題を抱える要因の一つとして、母語での会話スタイルが影響している可能性が考えられる。ある一つの話題上で話し手と聞き手の役割がどう交替しているかについて、中国語母語場面と日本語母語場面の会話データを比較分析した楊(2015)では、日本語母語場面においては話題上の話し手と聞き手が比較的固定的であるのに対して、中国語母語場面においては会話参加者の双方が話し手役割をめぐって競合することが多いことが明らかにされた。つまり日本語母語場面では、話し手がある話題について話している間、もう一方は聞き手に回り話し手のサポートをすることが多いが、中国語母語場面ではある話題に対して両者がどちらも話し手として発話をすることで会話を進めていくという。このように、聞き手が不在の会話に慣れている学習者にとっては、相手の発話に対して頻繁に「リアクション」を取ることが困難に感じられると推察できる。

以上の先行研究から、日本語の雑談においては、聞き手側が話し手の発話に対して多様な「リアクション」を取ることによって会話を円滑に進めており、特に相手から得た情報に対して興味・関心を示す「リアクション」は相手のさらなる発話を促進する効果を持つことがわかった。以下では、実際の雑談データから、学習者が抱える具体的な「リアクション」の問題について分析し、考察を加える。

4. 調査内容

4-1. 使用データの概要

接触場面の会話データについては、9名の日本語母語話者と5名の日本語学習者に協力を依頼し、1対1で話す15分の自由会話を録画・録音し文字化(注2)したものである。調査期間は2018年9月から10月であり、調査当時、対象者はすべて国内の大学に在籍する学生であった。5名の学習者には、それぞれ初対面もしくは一緒に雑談した経験がない日本語母語話者1名、普段よく雑談をする母語話者1名の計2名と会話をしてもらい、全10の会話データを収集した。

母語場面の会話データについては、科学協力学際センターホームページ内の、日本語e-learning雑談名人(注1)より抽出した。

4-2. 言いさし文の定義

2で見たように、日本語の会話においては、いわゆるあいづちだけでなく聞き手の「リアクション」がなければ会話がスムーズに進まなくなる傾向があると言えるが、特に言いさし発話の直後に「リアクション」が取られなかった場合は顕著に会話の流れが途切れてしまい、不自然な沈黙や強引な話題転換が引き起こされることがわかった(稲飯, 2019)。言いさしとは、「従属節だけで言いたいことを言い終わっている文」(白川, 2009: 7)であり、「今日は約束があるので…」「さっきまではいたんですけど」などのように、主節を伴わないが、意味としてはそれだけで完結している文のことをいう(稲飯作例)。稲飯(2019)では、収集した接触場面雑談のデータの中で現れたケド節、ノデ節、カラ節、シ節、テ形節で言い終わった文の5種類の言いさし発話を取り上げ、その直後になされる聞き手の反応の分析を行った。以下ではその中で問題があると判断された事例を対象に論じる。

5. 分析結果と考察

5-1. 接触場面における言いさし発話への反応

母語話者の言いさし発話に対する学習者の反応の中で、会話の流れを止めてしまうものとして観察されたのが、「うん」「はい」などのあいづちと、反応なしの二つであった。以下でその例を考察する。

例3

9-385 F5 じゃ平均だと(.) ((町の名前))からこっちらへんに来ると:(2) hh 大体どれ(1)ぐらい?
 9-381 J5 車ですか?
 9-382 F5 はい.
 9-383 J5 えでも(.)2時間ぐらいあれば着くんじゃないかと(1)とは思うけど.
 9-384 F5 はい. ←
 9-385 J5 (2)ゲーゲル先生:hhh 聞いてみます.

例3は、学習者F5が住んでいる町から大学までの距離について話している場面である。質問を受けた母語話者J5は、9-383の発話で「えでも(.)2時間ぐらいあれば着く

んじゃないかと(1)とは思うけど。」と述べている。この「けど」は逆接を表しているのではなく、不確定な気持ちを表していると考えられ、これ以上発話が続くことは期待されない。つまり、「町から大学までどれくらい？」という質問に対する答えはすでに完結しているとみなすことができるだろう。しかしこれに対してF5は「はい」と続きを促すようなあいづちを打ったため、続きに困ったJ5はインターネットで実際にかかる時間を検索している。

例4

- 7-408 F4 じゃ今の(2)仕事が(。)一番自分にふさわしい仕事だと思ってますか。
 7-409 J7 うん。まあ(。)なんだろうこの辺が合うかなっていうの(。)候補の(。)いくつかのうちではある(。)っていうかんじです。
 7-410 F4 ふん。
 7-411 J7 どうかなあ(1)うん。私はなんかこうパソコンワークとかは嫌だになって
 思ってた。
 7-412 F4 うん。 ←
 7-413 J7 それで(1)うん(2)((会社名))って知ってます？わかんない？
 7-414 F4 うん。
 7-415 J7 なんか日本の(。)いろんなところに(。)ホテルとか旅館とかを=
 7-416 F4 うん。
 7-417 J7 =運営してるとこなんですけど。
 7-418 F4 はい。 ←
 7-419 J7 そこに。
 7-420 F4 あ(。)ホテル。:

例4は、母語話者J7の就職先について話している場面である。この話題は7-408の学習者の情報要求から開始され、全体を通して情報提供-理解という連鎖が続いていることがわかる。7-411「私はなんかこうパソコンワークとかは嫌だになって思ってた。」という発話が、「だからそうではない仕事を候補に選んで決めた」という意図を含んでいるということが7-409の発話から推測されるが、それに対して「うん」というあいづちが返ってきたため、J7は7-413で「それで(1)うん(2)」と、1秒と2秒のポーズが示すように話が続けられなくなり、仕切りのような形で自分の就職先となる会社

に言及している。また、7-415、7-417の「日本の(.)いろんなところに(.)ホテルとか旅館とかを=」[「=運営してるとこなんですけど。」という発話は、文脈からJ7の就職先についての説明であると推測できるが、再び「はい」というあいづちが返ってきたため、J7は「そこに(就職することにした)」と主節を補っている。

例3、例4のように、文脈からその意図が推測できる言いさし発話に対して「うん」「はい」などのあいづちで反応を返された場合、母語話者は続きを要求されていると感じ、既に文脈に存在している主節を補おうとしたり、言葉に詰まって話が続けられなくなり話題を変えたりしていることがわかる。

例5

- | | |
|----------|--|
| 2-263 F1 | あれ、SAPとかは。 |
| 2-264 J2 | SAPってあれ？短期留学[みたい |
| 2-265 F1 | [うん |
| 2-266 J2 | (2)行った(1)ことない。 |
| 2-267 F1 | あ(1)あまり(2)興味はない？ |
| 2-268 J2 | うーん(2)なんか行くなら半年とか1年ぐらい行きたかった[けどー]。
(2)なんか、だらだらしてたらもう卒業(1)間近に[なってしまうって]。 |
| 2-269 F1 | [ああ |
| 2-270 J2 | (5)卒業したくないね。 |

また、例5の2-268の母語話者J2の発話には、「行きたかったけどー」「卒業(1)間近になってしまうって」という二つの言いさし発話が含まれているが、これらに対する学習者F1からの反応はない。J2は沈黙を挟みながら話を続けようとしているが、最終的には5秒の沈黙の後2-270「卒業したくないね」と発話することで話題を終息させる形となった。このように言いさし発話に対して反応が得られない場合も、言いさし発話に対してあいづちで反応を返された場合と同様、話し手は主節を補おうとしたり言葉に詰まって話を終息させようとしたりする。

以上の結果から、話し手は言いさし発話に対してあいづちのみで反応を返される、もしくは反応がないということを原則として予想しておらず、予想外の反応に対応する形で、不自然に話を続けたり、もしくは話を終息させたり、話題を変えたりしていることが明らかになった。その理由として、言いさし発話は、形式は未完結のよう

に見えてもすでに言いたいことを言い切っている表現であるため、話し手としてはそれ以上続ける発話はないととらえていること、そして言いさし発話には、ターンを譲るなど相手に働きかける役割があり(永田, 2001)、ターンを譲ったはずの相手から反応がないために沈黙が生まれていることが考えられる。

この問題において焦点となるのは、学習者が言いさし発話の機能を理解できているかどうかである。今回分析の対象とした「ケド」「ノデ」「カラ」「シ」「テ形」は、言いさし発話のように文末に現れるだけでなく、文中に現れ、その先に発話が続いていくこともある。そして、「ケド」「ノデ」「カラ」「シ」「テ形」などが文中で現れる場合、語りの継続支持をするためにあいづちが打たれることが多い(串田, 2009)。つまり、「ケド」「ノデ」「カラ」「シ」「テ形」などの表現が現れたときに、まだ話が続く場合はあいづちなどで語りの継続支持をすることが期待され、言いさし表現である場合は評価などあいづち以外の実質的な「リアクション」を返すことが期待されており、聞き手はその二つを瞬時に理解・判断して適切な反応を返す必要がある。

今回分析した例3~5のデータを見ると、学習者は文末の「ケド」「ノデ」「カラ」「シ」「テ形」などの表現を、まだ先に発話が続くととらえ、あいづちを打って、もしくは反応を返さずに、話し手の発話の続きを待っていた可能性が考えられる。よって、雑談における聞き手の行動の指導においては、話し手の語りをサポートするための実質的な「リアクション」を積極的に行う必要性を伝えるとともに、「うん」「はい」などのあいづちが有効な場面と、あいづちに加えて実質的な「リアクション」が必要な場面の違いについて明示し、指導していくべきであると言える。

5-2. 母語場面における言いさし発話への反応

ここでは、日本語母語話者同士の雑談データをもとに、言いさし発話に対する反応を分析する。

例6

- | | | |
|------|---|---|
| 6-36 | A | あなたこのサイズねってパッと見て渡されて(.) hh合うやつを. それは前測ったのとおんなじサイズを渡されて. |
| 6-37 | B | うん. |
| 6-38 | A | あ(.)見た目はそうなんだ. 着たら(.)そのおばさんに「ダメね」hhh |
| 6-39 | B | ええっ(h) |

- 6-40 A 一個大きいのもらったんだけど
 6-41 B うん
 6-42 A やべえと思って、[でももう今から変えられないから。
 6-43 B [うん
 6-44 B あ(.) そうなの(.) 変えられないんだ。 ←
 6-45 A なんか理由つけて返送すれば(.) ギリギリ届くんだけど(h) 太って入らないからってそれ絶対やじゃん(hh).

例7

- 1-03 A なんか(.) 友達の(2)お父さんかな(.) なんか(.) 寺の人らしいんだけど
 1-04 B うん
 1-05 A そうというのがわかる人みたいで
 1-06 B へえ
 1-07 A そこのトンネル見たときに(.) ああ(.) ここから先は行っちゃだめっていうふうに
 1-08 B ああ
 1-09 A 言ったっていう有名なトンネルがありました[て]
 1-10 B ふふ(.) だれが行ったとかいう話はないの? ←
 1-11 A 行ったとかっていう話はないんだけど(.) なんか(.) トンネルくぐったら1人増えてた的な(h) そういう(.) [逸話は。
 1-12 B [ベタだね。
 1-13 A ベタですけど。
 1-14 B へえー。
 1-15 A ま(.) もう(.) 見た目からしてほんとに昼間なのにめっちゃ暗かったり
 1-16 B ああ(.) ああ
 1-17 A すごい不気味なとこな[んで。
 1-18 B え(.) 今度行ってみてよ。 ←
 1-19 A それはいいです。ほんとにやです。

例6ではAの6-42の発話「でももう今から変えられないから」に対し、Bは「あ(.) そ

うなの(.) 変えられないんだ。」というように驚きを表す反応を示している。また、例7では、Aの1-09「有名なトンネルがありまして」という発話に対し、Bが1-10「ふふ(.) だれか行ったとかいう話はないの?」と内容を先取りするような質問を投げかけたり、Aの1-17の発話「すごい不気味なとこなんで」に対してBが1-18で「え(.) 今度行ってみてよ。」と挑発するような反応を示したりしていることがわかる。

このように、母語場面のやり取りにおいては、筒井(2012)で言及されていた、相手の話に興味や関心を示す評価の発話の他に、話し手のストーリー展開に積極的に関わっていくような質問をしたり意見を述べたりする例も観察された。

6. 指導の可能性と今後の課題

以上の分析結果などから、接触場面雑談における学習者の聞き手行動の課題として挙げられたのは、相手の話を促進する効果を持つ「リアクション」が少ないこと、言いさし発話の後のように、実質的な反応が期待されている場面であいづちを打つにとどまっていることの二点であった。これらの結果を踏まえ、今後学習者に雑談を指導していくにあたって必要となることは、以下の三点であると言える。

1. 日本語の雑談における聞き手役割の重要性を伝えること
2. 話の聞き手として、相手の話に興味を示したり、語りを促進したりする効果を持つ「リアクション」の練習をすること
3. あいづちが必要な場面と、あいづちに加えて実質的な「リアクション」が必要な場面の違いを伝えること

ここで課題となるのが、母語話者同士の雑談ではどのような発話に対してどのような「リアクション」が取られるのかがまだ明らかになっていないということである。今後は更に母語話者同士の雑談データを収集し、言いさし発話への対応に限らず、相手の発話に対して聞き手がどのような反応を取っているのかについて詳しく分析する必要がある。

このような「リアクション」に関連して、梅木(2011)では、相手の発話を繰り返すエコー型聞き返しの中に「相手発話そのものに対しておもしろがっていることを表示する」機能があることを明らかにしている(p. 130)。聞き返し発話は、相手の発話が聞き取れないときやわからないときに、それを解決するために使われるストラテジー

として注目されてきたが、母語場面の雑談においては、問題解決のためだけでなく「リアクション」の一つとしても使われていることがわかる。このようなエコー型聞き返しも含め、個々の「リアクション」が持つ機能を明らかにし、それを分類していくことが今後の課題である。

注

1. URL <http://www.ccis.tohoku.org/node/616/rss.xml>
2. 書き起こしの方法は『社会言語科学』10(2) pp. 14-15に掲載された「トランスクリプト(転写)に用いた記号の一覧」に従った。

参考文献

- 稲飯亜有美(2019)「接触場面の雑談における意図の読み取りに関する問題と分析」平成30年度東北大学文学部提出卒業論文。
- 申田秀也(2009)「聴き手による語りの進行促進—継続支持・継続催促・継続試行—」『認知科学』16(1), pp. 12-23.
- 水谷信子(1980)「外国語の習得とコミュニケーション」『言語生活』344, pp.28-36.
- 水谷信子(1993)「「共話」から「対話」へ」『日本語学』12(4), pp.4-10.
- 永田良太(2001)「接続助詞ケドによる言いさし表現の談話展開機能」『社会言語科学』3(2), pp.17-26.
- 西郷英樹・清水崇文(2018)『日本語教師のための日常会話力がグーンとアップする雑談指導のススメ』凡人社。
- 才田いずみ(2017)「雑談のコツを考える」『日本語教育方法研究会誌』23(2), pp.54-55.
- 才田いずみ・稲飯亜有美(2019)「雑談のポイントとしての「リアクション」」『日本語教育方法研究会誌』25(2), pp.76-77.
- 清水崇文(2017)『雑談の正体』凡人社。
- 白川博之(2009)『「言いさし文」の研究』くろしお出版。
- 筒井佐代(2012)『雑談の構造分析』くろしお出版。
- 梅木俊輔(2011)「エコー型聞き返しの発話機能と発話末イントネーションとの関係」『日本語／日本語教育研究』2, pp. 119-136.
- 楊虹(2015)「初対面会話における話題上の聞き手行動の中日比較」『日本語教育』162, pp.66-81.